

女子青年の Self-Esteem に関する一研究 ——自己評価の内部連関と他者の意味性という視点から——

野 田 麻 里

I. はじめに (略)

II. 問題と目的 (1)Self-Esteem とは何か 自尊感情・自己評価と訳される Self-Esteem (以下 S E) は、「自己意識の感情的側面」「自己評価の感情」としてとらえられる。自我同一性の中核をなし、個人の適応を規定する。自己意識が高まり、同一性を確立する青年期にあっては、この S E は重大な意味をもつ。(2)S E の形成 社会的な受容や承認が S E の外的源となり、自身の達成による有能感が S E の内的源となる。家族が重要な役割を果たすことを指摘し、家族関係の研究を概観した。(3)青年期の S E をとらえる視点として (1)S E の 2 側面 梶田 (1980) は、S E の自己優越感的側面と自己受容的側面を区別し、分けて考える必要性を指摘している。(2)S E の構造の性差—他者の意味性— 自己評価の構造には、顕著な男女差があり、男女における他者の意味性の違いが問題とされる。(3)自己評価 (S E) の内部連関 自己評価について論じるとき、個人の中で具体的な諸意識がどのように関係し、相互に支えあっているのか、その個人の S E を支えるものが何であるかといったところまでに本来関心をもつべきである。S E は主観的な成功経験や承認経験の上に形成されるものであるが、それはその人の価値観、要求水準などの内的枠組みによって決まるものであり、それらを含めて、包括的に個人の S E をとらえていく必要がある。(4)青年の S E 研究の方法 (1)臨床的研究法の必要性 先に記した内部連関を問題とするためには、従来のような質問紙法では限界がある。また、青年研究における事例研究、臨床的方法の必要性は多く指摘されている。松本 (1985) の枠づけ面接法 (臨床面接に近い形での継続的な個人面接) は、主観的事実としての個人の S E の内部連関をとらえ、事例の全体性を把握するうえで、有効な方法である。(2)青年心理研究の段階論 (略) (5)本研究の目的 筆者は自身の問題意識から、本研究を臨床実践の視座をつくるための基礎研究と位置付け、これまでの研究とは方法を変え、臨床的な視点をもった、新たな角度から S E をとらえなおす試みをするを目的とした。その際の視点としては、先に述べたことをふまえて、S E 形成における家族の問題、S E の 2 側面、構造の性差、

S E の内部連関、「他者」の意味性などである。

III. 研究 3 「質問紙調査による女子青年の S E の構造に関する研究—男子青年との比較による—」 1. 目的 男子青年との比較から、女子青年の S E の構造を明らかにする。 2. 方法 大学生 267 名 (男子 110 名、女子 157 名) に「充実感尺度 (大野, 1984)」「自我同一性混乱尺度 (砂田, 1979)」「S E 尺度 (Rosenberg 1965)」を実施した。 3. 結果と考察 (1)各尺度の構造について (因子分析による) (1)S E 尺度 梶田 (1980) のいう 2 側面に対応する 2 因子が見いだされ、「自己優越感的評価意識」「自己受容 (満足) 的評価意識」因子と命名された。(2)充実感尺度 「生きがい感」「心理的自立」など 4 因子が抽出された。(3)自我同一性混乱尺度 「自己不確実感・不全感」「社会不適応感」の 2 因子が抽出された。(2)各尺度の得点の男女比較 (1)S E 尺度 全体に男子が高得点である。女子は、他者を比較基準とした自己評価をするときには、たいていの人と同じくらいにはできるというひそかな自負心は男子と同じくらいにありながら、ポジティブな自己評価はできない。また、自己 (自己の要求水準や理想的自己像) を基準とした自己評価をするときには、自分のことを全くの失敗者だとは思わないけれども、男子に比べると自分のことを駄目だ、満足できない、尊敬できるようになりたいと考えている。(2)充実感尺度 (略) (3)自我同一性混乱尺度 (略) (3)各尺度の関係 因子別の相関を出し、男女での差の検定を行った。男子の他者を基準とした肯定的な自己評価は、自己不全感をもつことなく、自分の力を発揮できると感じ、精神的に自立しているという感覚や自信に支えられたものである。だから、他者を基準というのは、自己評価を行うときの比較対象の意味になる。また、自己受容的側面に関しても、自身の能力や実績に対する自負心と結び付いている。一方女子の自己評価は、他者が自分をいかに理解し認めてくれているかということと関連が強い。男子にとっての自己評価は、その対象である自己に帰属する認知が判断基準になるのに対して、女子は、自分が他者にどう扱われる存在としてあるかという、他者に帰属する認知が判断基準となる。自己が為しうることではなくて、他者の自己に対する態度、

他者の評価が自己評価を規定する。この意味で、女子にとっては他者が重要となる。

IV. 研究2「面接調査による女子青年のSEの内部連関、背景要因に関する研究—SE high 群と low 群の比較から—」

1. 目的 面接調査により女子青年のSEの在りかたの内部連関を明らかにし、high 群 low 群（以下H群L群）の比較から、その背景要因を検討する。

2. 方法 女子大学生92名にSE尺度を実施し、H群5名、L群6名に、自己評価を主題とした個別面接を実施した。

3. 結果と考察 (1)家族関係 ①両親との関係 全体の傾向としては、親の情緒的支持の有無によってHLにわかれていたが、そうでない事例について親からの「心理的自立」という観点から考察した。同性親ばかりでなく、父娘関係がSE形成に影響することも示唆された。②兄弟との関係 H群はいずれも良好な姉妹関係をもち、L群は、良好もしくはかわりの薄い男兄弟との関係か、複雑な感情の絡む姉妹関係をもっているという結果になった。兄弟関係がSE形成に及ぼす影響を扱った研究はほとんど無く、興味深い結果といえる。

(2)対人関係 L群に対人不安をもつものが多かった。

(3)将来 L群では具体的な展望が語られない。H群で子育て観などに関して語られたことから、SEの高い彼女らは、(意識的ではないにせよ)自らのSEを高く

めた(あるいは守った)もの(両親との関係や価値観など)をそのまま子どもに伝えようとしていることが明らかになった。子どものSEと両親のSEはこのような力動によっても関係していることが示唆された。

(4)自己評価 自己評価の内部連関は表に示した通りである。

V. 研究3「枠づけ面接法による女子青年のSEに関する事例研究—自己評価の内部連関という視点から—」

1. 目的 枠づけ面接によって低いSEをもつ女子青年のSEを事例的にとらえる。

2. 方法 低いSEをもつ5人の女子青年に5回の枠づけ面接を行った。

3. 結果と考察 各事例についての考察を行った。5事例のSEの低さはそれぞれ「挫折体験に由来する劣等感の強さによる自己否定」「万能感・無能感の揺れ 誇大自己の理想・要求水準の高さによる自己否定」「情緒的支持の欠如に由来する自己卑小感・自己嫌悪感による自己否定」「自己完結的・自己愛的な自己否定」「感情の抑圧による攻撃的な自己否定」と理解された。

VI. 全体的討論 1. 自己評価の内部連関 内部連関という視点をもつときに、梶田のいう他の意識とのかかわり(自己意識の横断面)ばかりでなく、因果関係という縦断面を含めた内部連関をみていくことが、SEを理解するうえで重要な視点となることが明らかになった。面接によってその個人の洞察をうながし、SEの内的な因果関係を明らかにしていく方法が有効である。それによって明らかになったSEの内部連関のモデルを4つ呈示した。図はその一例である。また、各章の結果の関連について考察を行った。

2. 自己評価における他者の意味性 III章でみたように女子のSEにおける他者の存在は大きい。男子のSEは自己信頼(inner SE)が中核をしめるものであり、他者は比較対象として存在する。一方、女子のSEは他者の自己に対する在り方が規定する outer SE が中核にあり、(男子はこれらは比較的独立しているのに対して)それが自己信頼にも強い影響をもっているものと思われる。また、他者との関係が問題になるほど、SEの低さの問題性が重篤になることが示唆された。さらに、SEが高い人との他者の意味性の違いなどについて論じた。

VII. 文献 Rosenberg, M. 1965 *Society and the Adolescent Self-Image*. Princeton Univ. Press. 他

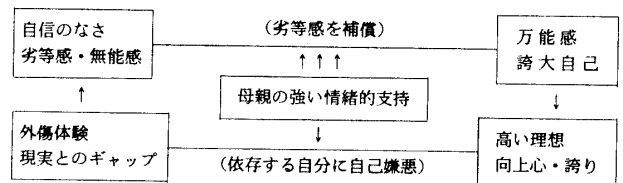


図4 万能感と無能感を揺れ動く内部連関

表16 自己評価を支える個人の内部連関

H	仲間はすれにされた経験 → 防衛的な自己信頼 → 他者の侵入 ↑ ↓ を回避	L	自信の揺らぎ ← 価値観の変化 → 自己嫌悪・自己卑小感 ↓ 自分の考え・自分がない
1	趣味に逃避 趣味が自信の支え 悪いところも認めて直していきたい	1	他者の望も重要ではない だが、自分を嫌いでない
H	親、祖父母、友達、彼、皆に愛される → 他者に受容されている感じ → 自分を高めていきたい ← 価値観の ↑ ↓ 自己信頼 揺れ やればできる 生き方を前向きに	L	大学での体験 → 価値観の変化 → 自己に不満定 ← 高い目標・向上 ↑ 他者に比べてではない 劣等感でない でも、こういう自分を否定しない
H	障害者、子どもとのかかわり → 他者・自己を尊重し、無条件に 受容する人間観 → 自己信頼 他者との比較で自分を見ない ↑ ↓ 何か起こっても自分なら大丈夫	L	受験の失敗 絶えず他者と比較 → 劣等感 ← 人の目を気にする 対人不安 ← 人に嫌われたくない 悪いところばかり気になる 悲観的 でも、自分をいとおしく思う
H	親に愛されかわいがられている → 自己信頼 → 自信が揺れても諦め てしまうのは嫌 自分ではやるしかない 辛いことも自分 気持ちしだいだと思う	L	母親の強い情緒的支持 依存関係 → 万能感と無力感の揺れ動き ↑ ↓ 目標の拡散 ← 自己決定のできなさ → 自信の喪失 ← 他者との比較 もつという自分になりたいが今もい
H	家族ともにクリスチャンであること → 信念・他者尊重の人間観 → 連帯感・平等観 行動の準拠枠 理想を追った生き方 ↑ ↓ → 自分を認める生き方 自信・安心	L	いじめの対象 → 他者の評価に敏感 → 劣等感 ← 自己の能力・行動・ 対人不安 考え方などに悲観的 → 自身に対する戒め 自分はあるがま までいいが、本当に苦しいこともある
		L	父親の情緒的不支持 自信過剰になら ないよう統制 マイナスの自己像 ← 人の目、評価 劣等感・他者羨望 を意識する 自分はこういう人間だと聞き直る